

日常の言葉を通して心と向き合う

——方言の学習——

河原 宜央

一 はじめに

本校は、呉市の南、瀬戸内海芸予諸島に位置する倉橋島の南岸にある、全校九十余名の小規模校である。生徒の九割は島内から通学し、一割は呉市内及び隣の島である能美島方面から通学している。私は、平成十一年度新規採用で本校に赴任した。

本校は、かつていわゆる「授業が成立しにくい」学校であったが、近年は学校・家庭・地域の努力により落ち着いてきているといわれている。卒業後は、就職する生徒が六割、進学（大学・専門学校含む）する生徒が四割であるが、進学率は年々上がってきている。

しかし、実際に生徒を目の前にして、この状況に甘んじてよいものかどうか私には疑問であった。言葉遣いが荒れているのである。語彙が少ない・コミュニケーション能力に欠けているところだが、ことなどは、昨今の高校生全般ついて指摘されているところだが、本校生徒に関しては、その上発する言葉そのものに問題があるといえる。具体的には、次のような特徴がある。

① 教員や目上の人に対して敬語・丁寧語を用いない。

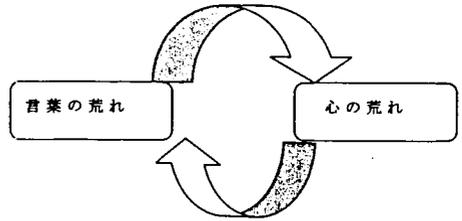
② 暴言が日常的に使われる。生徒同士・教員に対しても。（バカ・

死ね・殺す・往ね「去れ」・しばくぞ・うざい「うつつうし
い」・きもい「気持ち悪い」など）↓学年・性別を問わず。

もちろん、これは全ての生徒というわけではないが、全体的にこうした言語環境がまかり通る雰囲気が校内にある。こうした状況は、私のような生徒と年齢の近い教員や、非常勤の教員の前でよく起こるようで、生徒にとつて厳しい・怖い教員の前では起こらないようである。このことを鑑みると、かつては暴力などという形で噴出していた「荒れ」が、潜在化し、噴出しやすいつころで「言葉の荒れ」となつて顕在化しているといえる。

「言葉の荒れ」の問題点は、生徒の抱える内面的な課題（「心の荒れ」を再生産するという悪循環を作り出す点にある。相手をおかしくしたり、相手が傷つくようなことを言ったりすることで、自分の存在感を示しているのかもしれないが、このことは逆に自分の心を荒ませることにつながっているのではないかと考えられる。だとすれば、「言葉の荒れ」は放置しておく、更なる「荒れ」に発展する可能性がある。

再生産



顕在化

「言葉の荒れ」に対する指導としては、日常的な生徒指導が肝要であろうが、言語を扱う教科である国語の授業で何が指導できるかを考えてみた。

文学作品を通して心に迫る、というのも重要であるが、ここでは私の担当した「国語表現」の授業で直接言葉に向き合ってみることにした。「国語表現」(二年度で履修・二単位)で年間を通してねらいとしていたことは、次の二点である。

① ささまざまな表現に触れて自己の言語生活を見つめなおす。
(表現を豊かにする・適切にする)

② 言語表現の背景には、感情や思考といった心理的な作用があることを理解する。

とにかく言葉を通して、「心」に向き合わせたいという思いがあった。そのため、種類の表現を取り上げて、その表現に至る心情や思考を掘り下げていくという作業を授業展開の軸に据えた。そうすることで、言葉と心が結びついていることがわかり、それが自己に還元されたとき自分の言葉遣いやさらには心の状態を見つめなおす契機になる、というのが仮説であった。

二 「国語表現」年間授業展開

指導期間：平成十一年四月～平成十二年二月

対象学年：第二学年

一学期 ・ あいさつ言葉のいろいろな意味

・ 詩の表現「一つのメルヘン」(中原中也)

・ 歌謡曲の表現「長い間」(キコロ)

二学期 ・ ネーミング実践

・ 現代短歌の表現「チョコレート革命」(俄万智)

「五七五」(撰者：松任谷由実)

・ 短歌創作、品評会

・ 広島弁再発見「なまりむつかし」(壇ふみ)

三学期

一学期は、「表現に触れること」を中心に、二学期は「表現すること」を中心に授業を展開した。いずれも、表現にいたるまでの「感情」や「思考」に注目させた。三学期は、それまでの学習をまとめて、いよいよ身近な言葉に目を向けてみるという段階まで進めた。

三 授業展開例……方言の学習（広島弁再発見）

なぜ方言か（教材選定の理由）

言葉を通して心に触れるという通年の流れのまとめの段階としては、学習してきたことをぜひ自分自身にひきつけて考えさせたいと思った。また、言葉が心と結びついていることを改めて認識させたいとも考えた。そのようなことをふまえると、方言（特に広島弁）を学習することには次のような有効な点がある。

- ① 方言（広島弁）は、学習者が日常的な会話の中で用いる言語であるから、自分自身の言語生活にひきつけて捉えやすい。
 - ② 方言には、その土地の生活習慣や文化が凝縮された要素があり、言葉の背景を掘り下げて考えるのに適しているといえる。
 - ③ 学習者は、特に感情表現を方言ですることが多いので、言葉と心の結びつきについて考えやすい。
- このような理由で、方言（広島弁）を教材として取り上げることにした。

授業の目標

授業に際しては次のようなことを目標とした。

- ① 日常生活の中で用いている言葉に関心を持つ。
- ② 方言がその土地の生活習慣や文化・風土を背負った言語であることを知る。
- ③ 広島弁の特徴を知り、その背景について追究する。
- ④ 自分の言語生活を振り返り、自分自身を見つめ、表現に際し

ては、その適切な表現を心がける態度を育成する。

授業展開

授業展開としては、まずは自分たちの話している広島弁の特徴を、共通語との比較の中で捉えさせる。（目標の①と③）さらに、発展して方言にはその背景に風土・民俗が関係していることを理解した上で②、もう一度広島弁を追究してみる③、という流れである。

【導入】第一時：方言とは何かを知る。（さまざまな方言の紹介）

第二時：広島弁の特徴を考察する。（共通語との比較の中で）

【展開】第三時：方言の機構を理解する。①「なまりむつかし」（壇ふみ）を読む。

第四時：方言の機構を理解する。②「なまりむつかし」（壇ふみ）を読む。

第五時：方言の機構を理解する。③ビデオ視聴「あすか」と「吉本新喜劇」の比較。

【終結】第六時：広島弁を追究する。（具体的な語を取り上げて）

※ 指導期間：平成十二年一月～二月

四 授業の実践記録

①【導入】第一時～第二時

【目標】

- ・ 方言とは何かを知る。
- ・ 身近な広島弁に関心を持つ。
- ・ 共通語との比較の中で、広島弁の特徴を捉える。

【展開】

- ① プリント（資料1）を配布し、方言について語彙の面、アクセントの面から理解する。
- ② 広島弁会話の例（資料2）を見せ、実際に会話をしてみる。また、翻訳者もつけ、共通語での会話もしてみる。
- ③ 思いつく限りの広島弁を列挙し、多かった語句について短文を書き、共通語訳も書く。（資料3）
- ④ 広島弁と共通語のイメージの違いを挙げ、広島弁の特徴をまとめるとめる。

【結果】

方言については、予想以上に興味を持ち、自分の知っているいろいろな地方の方言についての自慢大会のようになった。また、意外にも学習者は、自分たちの話している言葉が方言であったことに気づいておらず、名古屋出身の私が指摘して初めて気づくような語彙もあった。したがって、共通語への翻訳作業も思いのほか時間を費やすことになった。

広島弁と共通語の比較については、「広島弁⇨荒っぽい感じ」

「共通語⇨丁寧な感じ」とまとまった。中には、「広島弁には濁点が多い」などと私も気づかなかったようなことを指摘する学習者もいた。

※ ここでいう「共通語」とは東京方言を基底に据えた日本語をさしている。「標準語」というと、東京方言があくまで標準で、他の地方の言葉は例外、という印象があるので、日本全国で通用する語ということで「共通語」という言い方を授業の中ではしている。方言は優劣の問題ではなくて、地域的な位相であるという授業者の認識を示したものである。

②【展開】第三時～第五時

【目標】

- ・ 方言が、その地域の生活・文化・風土を背景としていることを理解する。

【展開】

- ① 壇ふみの「なまりむつかし」（前半）を読んで、「京男」と「私」の違いは何であったかを考える。
- ② 「なまりむつかし」（後半）を読んで、筆者が方言の価値をどのように認識しているかを捕らえる。
- ③ 参考として、赤瀬川隼の随筆「方言は人間の美しい生態系」を読む。
- ④ NHK連続ドラマ「あすか」と吉本興業の「吉本新喜劇」の録画ビデオを視聴し、「つくられた方言」と「自然な方言」の違いをみる。

問 次の言葉はそれぞれどんな意味であろうか。後から選んで答えなさい。

- ① ばってん くぐも ×(九州)
- ② いけず 意地悪 ×(関西)
- ③ けった 自転車 ×(名古屋)
- ④ しょーしい 恥ずかしい ×(東北)
- ⑤ はぶてる すねる ×(広島)

すねる	意地悪	恥ずかしい	でも	自転車
-----	-----	-------	----	-----

問 次の言葉を読むとき、どんなアクセント（イントネーションを高く読むか低く読むか）で自分は読むか。例にならって書き込みなさい。

例 ア^レ（雨） エ^メ（飴）

- ① カ^キ（柿） カ^キ（牡蠣）
- ② エ^イガ（映画） ト^ラマ
- ③ オ^カダ（岡田） タ^ケシ
- ④ ア^レ（呉） ニ^シウ下（西宇土）
- ⑤ イ^チクミ（一組） サ^ンタミ（三組）
- ロ^ククミ（六組）

※ 「なまりむつかし」は、昭和五十九年（一九八四年）週刊誌

『サンデー毎日』に掲載された文章の一篇で、筆者壇ふみのエッセイである。前半は、役者として駆け出しのころ、芝居のために方言（京都弁）を一生懸命勉強したが、とうとうネイティブ（京男）には勝てなかったという話。後半は、新潟県朝日村の物知りの青年が、テレビのクイズ番組に出場し、とっさのときに地元の方言で勘違いをしてしまったという話。壇ふみは、これら二つの話から、人々の生活に染み付いている方言が最近若い世代の間で話されなくなってきたことを受けて、消えてほしくない、と結んでいる。教材は東京書籍の「現代語」の教科書（平成十年版）によった。

※ 「あすか」は、竹内結子主演のNHKの連続テレビ小説。京都の和菓子屋が舞台だが、京都出身の役者ではないため、方言に不自然さが残る。「吉本新喜劇」は、地元出身の役者が多く、自然な大阪弁をきくことができる。

【結果】 「方言」が、その土地の生活や文化を背負った言語である、ということとは、抽象的でないまいち理解しにくいようであったが、具体的に日本語と英語との比較などをするとう大方理解できたようである。

二つのビデオ比較の結果は、当初「どちらが自然に聞こえるか」ということだけ問い掛けて見せた。視聴後の感想を聞くと、「あすかの方が不自然」と解答した生徒が多かった。また、京都弁と大阪弁の違いについて指摘した生徒もいた。

いずれにせよ、「方言」というものに目を向け、それが地域独特のものであるということ、理屈と感覚で理解できたのではないかと思う。

（学習者の感想↓資料4）

③【終結】第六時

【目標】

・ 広島弁の語彙の背景を知ることを通して、自分の使用している言語について客観的にその意味や用法を確認する。
・ 自己の言語生活を見つめなおし、その適切な使用を心がける態度を育成する。

【展開】

① 「ひろしまべん100話」（町博光著 沢水社 一九九九）を読み（抜粋）、広島弁の語彙に関するエピソードを知る。

② 第二時で、最も多くの学習者から挙がった「タイギイ」について、その意味、用法について考察する。

【結果】

方言の授業を数時間続けてきたので、ここで改めて広島弁に立ち返ると、意欲的に言葉に向き合うようになったと思う。例えば、今回は「タイギイ」を取り上げたが、共通語の「ツカレタ」が単に肉体的な疲労感を表現しているのに対し、「タイギイ」は「面倒だ」とか「うっとうしい」といった精神的な苛立ちの意味も含めている、などという分析が学習者の側から上がってきた。第二時の時点では、「広島弁は荒っぽい」という表層の印象で止まっ

ていたため、打ち切りとなった。方言と民俗をたどっていくと、賤称語に行き当たる可能性もあり、授業者の側でよく地域性を理解しておかないと、不十分な対応になりかねないからである。

学習者の興味・関心を生かして授業展開をするならば、今後この点で統編的な授業を構築できるであろう。

(年間を通しての反省と課題)

倉橋高校という学校に関しても、学校現場というものに関してもほとんど手探りの状態から始まった一年であった。「言葉を通して心に向き合う」ということは漠然と念頭においていたが、決して体系的に授業計画を立てていたとはいえない。授業の中でも思わぬ展開になって右往左往したこともしばしばである。本校の生徒は授業に乗ってくるときとそうでないときの態度がはっきりしているのも、やはり指導計画の工夫が必要である。方言の授業の際には、「音読」「作文」「ビデオ視聴」「考察」と結果的にメリハリがあったので、比較的乗ってきたのだと思う。

また、言葉を扱う教科としては、言葉遣いそのものについて体系的に扱う授業も必要だったのではと考えられる。何をどのよう改善するのか、明確に教示しなければ言葉遣いを改める術もないからである。(現に受け持ったクラスの言葉遣いが目に見えてよくなったとは言いがたい。)

この方言の授業では、結果的に自己の言葉遣いについて見直す学習者もみられたが、大半は「日常の広島弁」について学習したところの方が印象に残ったようである。だが、先にも述べたように

「広島弁」＝「荒つばい言葉」と認識していた学習者もいたよう
で、むしろそこから「言葉の荒れ」の原因が「方言」にあるの
ではなく、自分のうちにあるのだということを実感する方向に切り
込んだ方が、より深められたかもしれない。

「言葉遣い」を考えさせる一つの試みとして取り組んでみたが、
また別の角度からもアプローチしていく必要があると感じている。

本校国語科では、常勤二名、非常勤一名で、それぞれが担当の
科目を全面的に受け持っているのも、教材の選定などは比較的自
由に行える環境にある。新学習指導要領でも、全体的に教育課程
を学校裁量で弾力的に運用できる方向にあり、この先ますます生
徒実態・学習者のニーズに即した教育内容を実践することが重要
になってくると私は考える。今後もこの点をふまえて、「目の前
の生徒にどのような力をつけるべきか」を常に考えながら、授業
を展開していきたい。

(広島県立倉橋高等学校)